

[調査報告] パピルス 45 番¹— 最古の福音書集 + 使徒の働き

伊藤明生

(東京基督教大学大学院教授)

概 要

パピルス 45 番とは、チェスター・ビーティー図書館（ダブリン）所蔵の聖書パピルス（CBLBP）1 番のことであるが、マタイの福音書の一部の断片はオーストリア国立図書館（ウィーン）に所蔵されている（Pap. Vindob. Graec. 31974）。現存するのは 30 葉（folio）のパピルス断片のみであるが、当初は 4 福音書と使徒の働き全部を収めた、200 頁を超える写本であった。30 葉の内訳は、2 葉にマタイの福音書、6 葉にマルコの福音書、7 葉にルカの福音書、2 葉にヨハネの福音書、13 葉に使徒の働きの本文がそれぞれ記載されている。

僅かな情報から想定できる写本の全貌は以下のようなものである。27 葉²（folio）の裏（verso）に 193 頁、そして 30 葉の表（recto）³に 199 頁という頁数が、上方欄外右よりにかろうじて読み取ることができる。他の頁の頁数は読み取ることができない。そして、11 葉と 12 葉、13 葉と 14 葉の頁が連続しているが、11 葉と 12 葉で裏・表・表・裏と一帖（quire）を構成し、13 葉と 14 葉で裏・表・表・裏と一帖を構成している。つまり、2 頁分の大きさのパピルス紙一枚を表の面が内側になるように真ん中で折って 4 頁で一帖を構成し、この 4 頁一帖を 56 帖集めて一冊のコーデックス（冊子本・綴じ本）が形作られたことになる⁴。193 頁である 27 葉

1 本報告を書き上げるに際して参考にした一次資料は、Karl Jaros et al. eds., *Das Neue Testament nach dem Ältesten Griechischen Handschriften* (Ruhpolding: Verlag Franz Philipp Rutzen; Ruhpolding und Mainz / Wien und Würzburg: Echter Verlag, 2006)。蛭沼寿雄著『新約本文のパピルス』第一巻（大阪キリスト教書店、1994 年）

2 現存する 30 葉には通し番号が付されている。「27 葉」とは、その通し番号で 27 番目の葉のことである。

3 パピルスの裏（verso）とは繊維が垂直の面のことで、表（recto）とは繊維が水平の面のことである。

4 パピルス 46 番の場合には、2 頁分の大きさのパピルス紙 52 葉を重ねてから真ん中で折っているので、真ん中までは裏・表・裏・表が繰り返されて、真ん中からは表・裏・表・裏が繰り返

の裏も199頁である30葉の表も同じパピルス紙の2頁目の面である。27葉の1頁目の面である表が、4の倍数の192頁であることから、パピルス45番の最初の頁は白紙で頁数の記入がなく、2頁目に1（実際にはギリシア語の一番目のアルファベット）と頁数が記入されたことが想定できる。

Skeatは、Kenyonの研究⁵を参考にしながら、以上のようなデータに基づいて、パピルス45番の構成が以下のようにあったと想定する⁶。

マタイによる福音書	49頁（1-49頁）
ヨハネによる福音書	38頁（50-87頁）
ルカによる福音書	48頁（88-135頁）
マルコによる福音書	32頁（136-167頁）
使徒の働き	55頁（168-222頁）

当初パピルス45番は、4福音書と使徒の働き全部が収録され、パピルス紙が素材であるコーデックス（綴じ本・冊子本）で、56帖で、綴じた部分がなくなって112枚、頁数にして224頁であった。最初と最後の頁は白紙で頁数の記入もなかったもので、上記では最後の頁数が222頁となっている。1頁の大きさは、およそ幅20cm×高さ25cmで、綴じ目の厚さ抜きで5-6cmの厚さとなり、1頁あたり平均36行から37行が収められたと想定できる⁷。Kenyon以下大多数の学者の見解によると、紀元3世紀前半に作成された、と作成年代が想定されている⁸。

される構造になっている。Eric G. Turnerはパピルス45番を“uniones”、パピルス46番をsingle-quire codeに分類している（*The Typology of the Early Codex* [repr. ed.; Eugene: Wipf and Stock, 2010], 59, 61）

- 5 Frederic. G. Kenyon, *The Chester Beatty Biblical Papyri*, Fasciculus I: General Introduction, (London: E. Walker, 1933), 6, 12-13.
- 6 Theodore. C. Skeat, “A Codicological Analysis of the Chester Beatty Papyrus Codex of Gospels and Acts (P 45)” in *The Collected Biblical Writings of Theodore. C. Skeat*, ed. James K. Elliott (Leiden: Brill, 2004), 156. Skeatの研究ですべてが解き明かされたわけでもない。ヨハネ福音書の断片と使徒の働きは「表・裏・裏・表」と裏面が内側になるように折られたようだ。
- 7 Eric G. Turnerはグループ5に分類している（*The Typology of the Early Codex*, 16）。
- 8 Frederic. G. Kenyon, *The Chester Beatty Biblical Papyri 2: The Gospels and Acts, Text* (London: Emery Walker, 1933), x. Philip W. Comfort and David P. Barrett は3世紀初め（*The Text of the Earliest New Testament Greek Manuscripts: New and*

パピルス 46 番（チェスター・ビーティー図書館所蔵の聖書パピルス 2 番）と比べると保存状態は悪く、判読が困難な箇所が多々ある。どのような順序で 4 福音書が並べられていたかも定かではないが、パピルス 45 番を初めて公にした Kenyon によると、マタイ福音書、ヨハネ福音書、ルカ福音書、マルコ福音書、使徒の働きという西方教会の伝統に則った順序であった。上記の Skeat の研究でも、この点は確認済みである。

パピルス 45 番の字体は明瞭で注意深く、ほとんど間違いもなく訂正は少ない。全体的に斜めに傾いた字体である。字体だけではなく、行そのものも全体的に右上がりに傾いている⁹。パピルス 45 番の写字生は、字体から判断する限り、素人ではなく、写字を職業とする者であったと思われる。

当時の習慣に従って、単語と単語の分かち書きはなく *scriptio continua* で、氣息符や句読点の使用は稀である。聖名を略記する「ノミナ・サクラ」は頻繁に用いられ、十字架に関連する名詞 **σταυρός** と動詞 **σταυρόω** を略記するスタウログラムの初期の例が見出される。マタイ福音書 26 章 2 節 (2 葉裏¹⁰、上記の復元で 40 頁 14 行。写真 2 参照) に **σταυρωθήναι** が **ϸΡΝΛ[ι]** と表記され、上に横線が引かれている。ルカ福音書 14 章 27 節 (15 葉表、117 頁 19 行) で **σταυρον** を **ϸΡΝ** と略記され、上に横線が引かれている。

パピルス 45 番で「ノミナ・サクラ」として表記されているものには、「神」「主」「イエス」「父」「霊」「子」などがある。「イエス (Ἰησοῦς)」の「ノミナ・サクラ」形は、最初のイオータと最後のシグマの組み合わせではなく、冒頭の二字イオータとエーター (ih) である。興味深いことに人の子の「子」、ダビデの子の「子」、「父母を敬え」の「父」、悪霊に取り憑かれた子供の父親、汚れた霊の「霊」までも「ノミナ・サクラ」として略記されている。5 葉裏 (上記の復元に従うと 147 頁 14 行) で十戒の「父と母を敬え」がマルコ福音書 7 章 10 節で引用されている。前後の文

Complete Transcriptions with Photographs [Wheaton: Tyndale House Publishers, 2001], 155-57.)

9 Philip Comfort は、P. Michigan 3、P. Egerton 3、P. Oxyrhynchus 2082、P. Rylands 57 を類似した字体として例示して、作成年代を紀元 200 年頃としている (*Encountering the Manuscripts: An Introduction to New Testament Paleography and Textual Criticism* [Nashville: Broadman and Holman, 2005], 173)。私見では P. Oxyrhynchus 1092 がソパピルス 45 番に非常に似ている (William. A. Johnson, *Bookrolls and Scribes in Oxyrhynchus* [Toronto: University of Toronto Press, 2004] 巻末の写真 3)。

10 ウィーンのオーストリア国立図書館所蔵部分 (b)。

脈でも、父は一貫して「ノミナ・サクラ」として略記され、母の方は略記されないで表記されている。同じように、悪霊に憑かれた子供も「ノミナ・サクラ」として略記されている（7葉裏、151頁11行、マルコ福音書9章24節）。「汚れた霊」は6葉裏（上記の復元によると148頁1行）などで略記されている。意味によって略記する、しないを区別することなく、特定の単語を一貫して略記しているように見受けられる。ただパピルス45番で現存するものは、全体の3分の1であるので、最終的結論を下すのは差し控えた方が良いかもしれない。そもそも「ノミナ・サクラ」という習慣がどのような意図で、どのように始められたものであるか十分に明確でない現実を目の当たりにしているようにも思われる。「ノミナ・サクラ」（訳すと「聖なる名前」）という発想から、父なる神を指すから、父を略記したと理解できる。派生して、父なる神を指さない「父」も略記したと考えられる。しかし、そのように考えること自体が妥当であるかどうか再考の余地があるかもしれない。

同時代の他の写本と同じように、単語と単語の分かち書きはない。ただ文末には、右肩に黒点が見出され、心持ち間合いが設けられている。また、アクセント記号や氣息符は用いられていないが、 $\text{IN}\alpha$ ($\text{iv}\alpha$) などイオータで始まる単語の冒頭のイオータの上、 γMIN ($\dot{\gamma}\mu\dot{\iota}\nu$) のユブシロンの上に分音記号（diaeresis）が付けられている ($\text{in}\alpha$ 、 $\dot{\gamma}\text{MIN}$) ¹¹。

パピルス45番は、業者から購入したものであるので、出処の詳細は定かではないが、ファユムまたはナイル川東岸の古代のアフロディトポリス近辺の修道院の図書館または、教会の図書館の廃墟で発見されたようである。

訂 正

パピルス45番の場合、訂正の跡は多くはない。現存する本文で14箇所を数えることができる ¹²。14箇所の訂正のうち、マタイ福音書25章42節と使徒の働き7章12節の2箇所は、写字生とは別の手による訂正である。マタイ福音書25章42節

11 二つの母音で一音節となる二重母音と区別して、二つの母音を独立して発音することを明記するために分音符合は用いられるが、古代での用例では単語が母音で始まることを示すことが意図されているようである。

12 James R. Royseによる (James R. Royse, *Scribal Habits in Early Greek New Testament Papyri* [New Testament Tools, Studies, and Documents 36; Leiden: Brill/Atlanta: SBL, 2008], 114)。

冒頭はオーストリア国立図書館所蔵の1葉の裏3行目にあたる。「私が飢えたときにあなたがたは私に食べる物を与えなかった (ἐπείνασα γὰρ καὶ οὐκ ἔδώκατέ μοι φαγεῖν)」の否定辞 (οὐκ) が写字された本文に欠落していたが、行間に加えて訂正されている。本文を写字した字体とは異なり、太めの濃い字体で書き込まれている (写真2参照のこと)。

使徒の働き7章12節は、178頁4行目である。「彼 (ヤコブ) が父祖たちを遣わした (ἐξαπέστειλεν τοὺς πατέρας)」となるべき箇所では冠詞 (τοὺς=ΤΟΥΣ) の最後のシグマ(ς)が抜けて¹³次の単語の最初の文字ピー(π)が書かれているので、ユプシロン(γ)の上に太めの濃い字でシグマが書き加えられている。

残り12箇所の訂正は写字生自身によるものと思われる。写字生自身による訂正には、写字している最中に (in scribendo) 写し間違いに気付いて訂正した場合と写字が一段落して後から訂正を加えた場合の2種類の訂正がある。前者の場合と後者の場合で訂正の仕方が異なるので、区別することができる。前者の場合は、即座に加除して訂正するのに対して、後者の場合には行間か欄外に書き加えて訂正している。

パピルス45番で、写字しながら訂正した箇所である、とほぼ間違いなく判断できる箇所が2箇所ある。1箇所目は、10葉の裏で、Skeatの復元によると107頁21行から22行にかけてである (写真1)。現代の章節区分でいう、ルカ福音書9章57節を写字し終えて58節の冒頭部分を書いたところで、写字生の目が一行ほど前に戻ってしまい、57節の後半部分を再度書き写して、57節を写字し終えようとするところには、写字生自身も間違いに気付いて58節の冒頭から写字し直している。そして、そこまでの重複した部分を上に黒点を書いて削除している¹⁴。パピルス45番の該当箇所を復元すると以下ようになる。

13 ギリシア語では冠詞も性数格によって語尾変化する。最後にシグマがない形 (τοῦ) では、男性か中性の単数属格で、最後にシグマがあると男性複数対格になる。動詞 ἐξαπέστειλεν の直接目的語としては対格が相応しく、男性複数対格の名詞 (πατέρας) とも性数格が一致することが望ましい。

14 削除する箇所の上に黒点を書き記すのは、たいへん控え目な削除の仕方に思われるが、当時の通常の方法である。この箇所の訂正については、Philip. W. Comfort and David. P. Barrett (eds), *The Text of the Earliest New Testament Greek Manuscripts* (New and Complete Transcriptions with Photographs; Wheaton: Tyndale, 2001), 175 と Royse, *Scribal Habits*, 115-16を参照のこと。

ΕΙΣ]ΕΤΕΡΑΝΚΩΜΗΝ·ΚΑΙΠΟΡΕΥΟΜΕΝΩΝΑΥΤΩΝΕΝΤΗΘ[Δ]ΩΙΕΙΠΕ
 ΤΙΣ]ΠΡΟΣΑΥΤΟΝΑΚΟΛΟΥΘΗΣΩΣΟΙΟΠΟΥΕΑΝΨΠΑΓΗΣΕΙΠΕΝΤΙΣΠΡΟΣ
 ΑΥΤ]ΟΝΑΚΟΛΟΥΘΗΣΩΣΟΙΕΙΠΕΝΑΥΤΩΙΟΙΗΛΙΑΛΩΠΕΚΕΣΦΩΛΕΟΥΣΕ

上記を書き改めると、以下ようになる。

εἰς] ἑτέραν κώμην. καὶ πορευομένων αὐτῶν ἐν τῇ ὁδῷ εἶπεν
 τις] πρὸς αὐτόν· ἀκολουθήσω σοι ὅπου ἐὰν ὑπάγῃς¹⁵ εἶπεν τις πρὸς
 αὐτ]όν· ἀκολουθήσω σοὶ εἶπεν αὐτῷ ὁ Ἰησοῦς αἱ ἀλώπεκες φωλεοὺς ἔ-

分かち書きされていない写本であれば、容易に生じそうな間違いである。

もう1箇所は71頁17行目、ヨハネ福音書11章52節の二つ目の単語が正しくはΟΥΧ (οὐχ) となるどころ、オミクロンを抜かしてΥΧ (υχ) と書いてしまい、すぐに間違いに気付いて、ユブシロン (γ) の上からオミクロン (ο) を、キー (χ) の上からユブシロン (γ) を書いて訂正している¹⁶。

残り10箇所を順番に見ていく。先ずヨハネ福音書10章14節(16葉裏、68頁12行。写真3)は「わたしのものはわたしを知っている」はNestle-Aland28版のギリシア語本文ではγινώσκουσίν με τὰ ἐμάである。パピルス45番では動詞γινώσκουσίνの語尾-ουσίν (-ΟΥCIN) が本文として記載された後にει (ει) と訂正されている。主語(τὰ ἐμά)が中性複数の場合には、動詞は単数でも複数でも良い、という文法理解に従えば、どちらでも構わなかった。ところが、パピルス45番の写字生は、3人称単数に「訂正」したかったようである。

ヨハネ福音書11章47節(17葉裏、71頁9行目)の動詞は最初ποιησομεν(直説法未来時制形)と書かれたが、後に行間でησοの上にουと書き込んで直説法現在時制形(ποιουμεν)に訂正されている。同じ頁の13行目右端の2文字は最初αυと書かれたものがουに訂正されている。

ルカ福音書については、既に写字しながらの訂正に触れたが、それ以外では9章36節(10葉表、106頁23行目)に訂正の跡が認められる。動詞が一度ἐόρακενと3人称単数形で記載されたが、語尾(-κεν)のエブシロンの上の行間にアルファ

15 この読みがパピルス45番とベザ写本で見出されるが、大多数の写本の読みはἀπέρχῃである。

16 写真では判然としない面もあるが、ほぼ間違いのないであろう。Royse, *Scribal Habits*, 116. 参照。

が記されて、複数形語尾 (-**καν**) に訂正されている。

マルコ福音書では 6 章 22 節 (4 葉表、145 頁 15 行目) に訂正の跡が見出せる。パピルス 45 番では「ヘロデが少女に言った (**εἶπεν ὁ Ἡρώδης τῷ κορασίῳ**)」と写字した後に「ヘロデ (**Ἡρώδης**)」の上の行間に「王 (**βασιλευς**)」と訂正されている。

使徒の働きでは 5 箇所、訂正の跡が見出させる。5 章 38 節 (176 頁 18 行) は損傷が激しい部分であるが、**-θηετ-** と写字した後に、エータとエプシロンの間の上部にシグマが書き込んであることが判別できる。未来時制の受動態の動詞 (**καταλυθήσεται**) を記載するべきところ、シグマを書きそびれたことに気が付いて書き込んだ跡である。

7 章 14 節 (178 頁 7 行目) も綴り字の訂正である。**συνγένειαν** (**ΣΥΝΓΕΝΕΙΑΝ**) と表記されていたので、ニューの上にガンマを書き加えて、**συγγένειαν** (**ΣΥΓΓΕΝΕΙΑΝ**) と正しい綴りに訂正されている。

10 章 38 節 (186 頁 16 行目) は、頁の下端で分かり難いが、**μετ' αὐτοῦ** は、心持ち上方なので、書き損ねて後で書き加えたように見える。この句がないと意味が通じない一文である。

13 章 12 節 (190 頁 12 行) では、最初 **γεγονως** (**ΓΕΓΟΝΩΣ**) と写字してあった。この形は完了分詞の男性単数主格形である。オメガ (**ω**) の上にオミクロン (**ο**) を小さく書き加えて、中性単数対格に訂正されている。

16 章 17 節 (197 頁 6 行) では **κατακολουθοῦσαν** と写字されていた。この語尾 (**-οῦσαν**) では現在分詞女性単数対格形またはアオリスト分詞男性単数対格形である。占いの霊に憑かれた女性がパウロにつきまとう、という意味なので、最後のニュー (**v=N**) を消して、女性単数主格の語尾 (**-οῦσα**) に訂正してある。

以上、14 箇所、訂正の跡を概観した。全体的に、比較的細かな訂正がなされていることがわかる。綴りの間違いや文法的な間違いを一字一字丁寧に訂正している写字生の注意深い仕事振りを垣間見ることができた。写字生が自らの判断で訂正したのか、底本などの手許にあった写本の本文に従って訂正したか大きな違いであるが、確認する術はない。

本文の特徴

パピルス 45 番の本文のもっとも顕著な特徴は簡潔さである。Ernest C. Col-

well¹⁷ および James R. Royse¹⁸ など異口同音にパピルス 45 番の本文が簡潔であることを指摘する¹⁹。Nestle-Aland28 版の本文を目安として考えると、パピルス 45 番の本文で追加がある場合よりも、欠落がある方が圧倒的に多い。

パピルス 45 番の本文で欠落が見出される、顕著な箇所²⁰ は、ヨハネ福音書で 2 箇所、ルカ福音書で 2 箇所、マルコ福音書で 8 箇所を挙げることができる。

パピルス 45 番には、ヨハネ福音書の 10 章と 11 章の大部分の本文が残されていると読むことができる。11 章 7 節は 16 葉表 (Skeat によると 69 頁) 27 行であるが、「その後、イエスは、『……』と弟子たちに言われた」の「弟子たちに (τοῖς μαθηταῖς)」がパピルス 45 番では欠落している。有名な 11 章 25 節は、17 葉表 (Skeat の復元に従うと 70 頁) 9 行から 10 行にかけてである。破損があつて判読は難しいが、「わたしはよみがえります。いのちです。(ἐγὼ εἰμι ἡ ἀνάστασις καὶ ἡ ζωή)」の「いのちです (καὶ ἡ ζωὴ=καλιηζωη)」が見当たらない。

ルカ福音書 12 章 2 節は、13 葉裏 (112 頁) 12 行から 13 行であるが、パピルス 45 番には「隠されているもので知られずに済むものは (καὶ κρυπτόν ὃ οὐ γνωσθήσεται)」というギリシア語の最後の 5 単語がない。そして、ルカ福音書 12 章 9 節はパピルス 45 番にない。同じ頁の 25 行には、8 節の後に 10 節が続いて、9 節は全く見当たらない。

マルコ福音書 6 章 40 節 41 節 (パピルス 45 番 5 葉表、上記の復元の 146 頁) では詳細の記載が省略されている。6 行の右端から 7 行の左端が 40 節にあたるが、40 節最後の「百人毎、五十人毎」²¹ (κατὰ ἑκατὸν καὶ κατὰ πενήκοντα) を意味するギリシア語の単語が 4 つ欠落している。そして 41 節 (7 行目) に移ると「パンと魚を取り (λαβὼν τοὺς ἄρτους καὶ τοὺς ἰχθύας)」と Nestle-Aland28 版本文で繰り返されている「5 つ (πέντε)」 「2 匹 (δύο)」という数が明記されていない。読者が読む際に意味は通じて、問題は感じないと思われるが、Nesl-

17 Ernest C. Colwell, "Method in Evaluating Scribal Habits: A Study of P⁴⁵, P⁶⁶, P⁷⁵" in: E. C. Colwell, *Studies in Methodology in Textual Criticism of the New Testament* (New Testament Tools and Studies 9; Leiden: Brill, 1969), 106-24, 特に 118-21.

18 Royse, *Scribal Habits*, 103-97.

19 Comfort and Barrett (eds.), *The Text of the Earliest New Testament Greek Manuscripts*, 160-62 も参照のこと。

20 ここでは、Nestle-Aland 28 版の textual apparatus に記載されていることを顕著であることの目印とした。

21 新改訳「百人、五十人と固まって」

Aland28 版の本文と比べると詳細が省かれて描写が簡潔になっている。

同じ頁の 18 行目から 19 行目にかけて、欄外の破損部分とも重なるので、断言することは避けなければならないが、Nestle-Aland28 版のマルコ福音書 6 章 48 節本文に見出される「夜中の (τῆς νυκτὸς=ΤΗCΝΥΚΤΟC)」という 2 単語が見当たらない。

マルコ福音書 8 章 11 節は、6 葉表(149 頁)1 行から 3 行にかけて記されているが、「彼からしるしを求めた(ζητοῦντες παρ' αὐτοῦ)」がない。8 章 38 節は、7 葉表(150 頁) 8 行から 9 行にかけて「この淫らで罪深い時代にわたしとわたしのことばを恥じる者はだれでも……」という箇所、左端と右端の破損が激しく、欠落した単語がどの単語であるか見極めることができない²²が、「わたしとわたしのことばを (με καὶ τοὺς ἐμοὺς λόγους)」の 5 単語を記載するに十分なスペースの余裕はないので、1 単語程度はないものと思われる。

9 章 25 節は、7 葉裏 (151 頁) 13 行で「汚れた霊を叱って、彼に言う (ἐπετίμησεν τῷ πνεύματι τῷ ἀκαθάρτῳ λέγων αὐτῷ)」の「汚れた (τῷ ἀκαθάρτῳ)」と「彼に (αὐτῷ)」がパピルス 45 番の本文にはない。

以上、Nestle-Aland28 版と比べてパピルス 45 番の本文で欠落している箇所を見た。逆に付加されている箇所もパピルス 45 番にはある。ヨハネ福音書で 2 箇所、ルカ福音書で 2 箇所、マルコ福音書で 2 箇所を概観する。

ヨハネ福音書 10 章 34 節 (16 葉表または 69 頁 7 行目の左端) には、「聖書には (ΕΝΤΗΓΡΑΦΗ)」という不要な句が「書かれている (γεγραμμένον)」と「律法に (ἐν τῷ νόμῳ)」の間に見出される。

ヨハネ福音書 11 章 43 節 (17 葉裏 = 71 頁 2 行目) は破損があつて断片的で判読は困難であるが、イエスが墓の中のラザロに声をかけている言葉で「こちらに (δεῦρο)」と「外へ (ἔξω)」の間に「来なさい (ελθε)」という動詞を記すスペースが見出される²³。

ルカ福音書 11 章 15 節 (12 葉表、110 頁 17 行目) には、単なる「彼らは言った (εἶπον)」の代わりに「彼らは頑なに次のように語った (ἐλλαλχανοχΥΡΟΙ-ΛΕΓΟΝΤΕC)」と書き記されている。

ルカ福音書 12 章 24 節 (113 頁 10 行目) の「カラスをご覧なさい (κατανοήσατε τοὺς κόρακας)」の動詞の後で「カラスを」の前に「空の鳥と (ταπε-

22 Nestle-Aland 28 版によると「ことば (λόγους)」が欠落したことになる。

23 この異読は、Nestle-Aland 28 版には記載されていない。

ΤΕΙΝΑΤΟΥΟΥΡΑΝΟΥΚΛΙ)」が見出され、「空の鳥とカラスをご覧なさい」となっている。

パピルス 45 番のマルコ福音書 6 章 47 節の本文、5 葉表 (146 頁) 16 行に「以前、昔」を意味する *πάλαι* という副詞がベザ写本や f1 という写本群と共に見出される。

マルコ福音書 7 章 5 節は、5 葉裏 (147 頁) 6 行の右端に「洗っていない (ΚΑΙΛΑΝΙΠΤΟ[ΙC])」と接続詞と形容詞が見出される。Nestle-Aland28 版に記されている「汚れた手で (κοιναῖς χερσίν)」と共に記載されている。

パピルス 45 番の本文では、興味深いことに使徒の働き 15 章 2 節と 7 節の間に混乱が見出される。28 葉裏、194 頁 10 行半ばから 7 節が始まるが、次の 11 行から 13 行までは 2 節が書き写されている。以下に、10 行から 13 行までを書き写した (写真 4)。

ΙΔ]ΕΙΝ ΠΕΡΙ ΤΟΥ ΛΟΓΟΥ ΤΟΥΤΟΥ Π[Ο]ΛΛΗC Δ[Ε] ΖΗ[ΤΗCΕΩC
ΟΛΙ]ΓΗCΤΩ ΠΑΓΛΩΙΚΑΙ ΤΩΙ[Β] ΑΡΝΑΒΑ[ΠΡ]ΟC ΑΥ[ΤΟΥC
ΑΝΑΒΑΙ]ΝΕΙΝ ΠΑΓΛΟΝ ΚΑΙ ΒΑ[ΡΝΑ]ΒΑΝ ΚΑΙ ΤΙΝΑC ΑΛΛΟΥC
ΤΟΥC] ΑΠΟCΤΟΛΟΥC ΚΑΙ ΠΡΕCΒΥΤΕΡΟΥC ΓΕΝ[ΟΜΕΝΗC

現代使用される通常の表記に変更すると以下ようになる。

ιδεῖν περὶ τοῦ λόγου τούτου. πολλῆς δὲ ζητήσεως
οὐκ ὀλίγης τῷ Παύλῳ καὶ τῷ Βαρναβᾶ πρὸς αὐτούς,
ἀναβαίνειν Παῦλον καὶ Βαρναβᾶν καὶ τινὰς ἄλλους
τοὺς ἀποστόλους καὶ πρεσβυτέρους γενομένης

Nestle-Aland 28 版の本文が本来の本文であったとすると、上記のようなパピルス 45 番で生じた混乱がどのように生じたか説明することは、それほど困難ではない。使徒の働き 15 章 2 節は「小さくない紛争と議論が生じたとき (γενομένης δὲ στάσεως καὶ ζητήσεως οὐκ ὀλίγης)」という表現で始まっている。そして、7 節の冒頭には「多くの議論が生じたとき (πολλῆς δὲ ζητήσεως γενομένης)」という類似表現が見出される。7 節の冒頭を書き写した際に、写字生の目が 2 節の類似表現に戻ってしまった。2 節を写字してから、間違ったことに気付いて、もう一度 7 節に戻ったものと思われる。ところが、ルカ福音書 9 章 57 節 58 節で書き

写し間違えたときのように、訂正された跡はない。パピルス 45 番の写字生は、自らが書き写し間違えたことに全く気付かなかったのか。2 節と 7 節では場面が異なっている、間違いには容易に気が付きそうである。また、目が 2 節に一端戻ってしまったが、間違いに気付いたからこそ、もう一度 7 節に戻っていると思われる。パピルス 45 番の現存する本文には、満足以 2 節は残っていない。かろうじて、2 節の最後の 2 単語 (ζητήματος τούτου)²⁴ が 194 頁の 1 行目に残っている程度である。193 頁は、14 章 23 節で終了している。

パピルス 45 番の写字生が 7 節に 2 節を挿入してしまった間違いに気付かなかった理由としては、パピルス 45 番の写字生が用いた底本の本文が既に混乱していたことが考えられる。7 節の時点でパウロとバルナバがエルサレムに上って、この件を巡って使徒たちと長老たちと議論することに決めた。異なることが 2 節には記載されていた。あるいは、2 節が抜け落ちていたのかもしれない。いずれにしても、この箇所のパピルス 45 番の本文は十分に説明しにくい箇所である。

写字生と唯一の読み (singular readings)

この他、接続詞や代名詞の類で、Nestle-Aland28 版の本文にあるのにパピルス 45 番にはなかったり、逆に Nestle-Aland28 版の本文にはないのにパピルス 45 番の本文にあったり、細かい異読は多数見つかる。概してパピルス 45 番の写字生の評価は高くない。パピルス 45 番の本文に施されている訂正の数は少ないにも拘わらず、他の写本に見出されない異読 (singular reading) が多いことが、パピルス 45 番の写字生の評価を低くしている。微妙に異なる評価の中でも、とりわけ厳しい評価を下しているのは Colwell である。

This scribe does not actually copy words. He sees through the language to its idea-content, and copies that—often in words of his own choosing, or in words rearranged as to order.²⁵

The most remarkable fact about the text of p⁴⁵ is this mass

24 ただし ζητήματος は判読できる状態にはない。

25 Colwell, "Method in Evaluating Scribal Habits", 117.

of Singular Readings.²⁶ P⁴⁵ is an undisciplined text, obviously not subject to learned or to ecclesiastical control. A survey of these readings gives one a clear impression of a scribe who felt free to modify the text in matters of detail. P⁴⁵ is a maverick, as Westerners would say; it runs wild.²⁷

P⁴⁵ gives the impression of a scribe who writes without any intention of exactly reproducing his source. He writes with great freedom—harmonizing, smoothing out, substituting almost whimsically. Here again there is no evidence whatever of control by a second party (fewer than three singular readings per hundred are corrected), nor in fact of external controls of any kind.²⁸

パピルス 45 番の写字生は、自由奔放に写字している、とは写字生として失格宣言をするに等しい評価である。あくまでも Colwell は、パピルス 45 番の本文についてではなく、写字生自身の資質について評価を下している。他の写本には見出されない読み (singular reading) を巡る理論が、上記のような判断の背後にはある。Colwell 自らの表現では以下のとおりである。

Since in most readings the student cannot determine whether or not the scribe copied or originated the reading, this study is restricted to singular readings (readings without other manuscript support) on the assumption that these readings are the

26 Royse はパピルス 45 番に 227 の singular reading を見出している (*Scribal Habits*, 111, 775–90)。

27 Ernest. C. Colwell with Ernest. W. Tune, “Method in Classifying and Evaluating Variant Readings” in Colwell, *Studies in Methodology in Textual Criticism of the New Testament*, 105.

28 Colwell, “Method in Evaluating Scribal Habits,” 117. この引用の冒頭は、さすがに Royse も言い過ぎと感じたようである (*Scribal Habits in Early Greek New Testament Papyri*, 124) が、Royse は、他の写本に見出されない唯一の読みは、写字生が作り出したという Colwell の前提は基本的に踏襲している。

creation of the scribe. The restriction of this study to singular readings can be made with confidence in view of the wealth of manuscript attestation for the Greek New Testament.²⁹

他の写本に見出されないで、パピルス 45 番のみに見出される読み（パピルス 45 番の singular reading）は、パピルス 45 番の写字生が作り出した読みである、と想定する考え方である。説き明かすと次のような論理である。新約聖書の写本は、他の古代の文献と比べるとはるかに多くの写本が発見されている。その膨大な写本の中に見出されない唯一の読み（singular reading）とは、その写本の前にも後にも存在しなかったと想定できる。もし、その写本の前に存在していたならば、必ずどこかの写本に書き写されて残ったに違いない。それ以前の写本になかったとしても、その写本から書き写された他の写本に残った筈である。残っていないということは、他の写本などと比較検討した結果、本来の読みではないと判断されて、残らなかったものと想定される。

基本的に Colwell の立場を踏襲しているが、Royse の議論はもう少し慎重である³⁰。それでも唯一の読み（singular reading）が見出される写本を作成した写字生が、唯一の読みを作り出したことに疑いの余地があるとは思っていない。Royse にとっては、唯一の読みが見出される写本を作成した写字生が、その唯一の読みを作り出さなかったと想定すると、その唯一の読みは、ある本文の伝承（tradition）に属していたにも拘わらず、他の写本には全く痕跡を残さなかったことになる。伝承として流布していた以上は、どこかに痕跡を残したに違いない、と Royse は考える。

確かに新約聖書の写本は、他の古代の文献と比べると、大量の写本が作られ、沢山の写本が発見されている。同時に、膨大な量の写本が様々な形で処分され、永遠に失われたことも事実である。当初キリスト教は迫害の対象となり、キリスト教にとって大切な文書である新約聖書自体も弾圧の対象となった。新約聖書の写本を見つけ出しては処分することが、迫害のひとつの形となった。

具体的に、マルコ福音書を例とすると、4 世紀以後のシナイ写本、ヴァティカン写本、アレクサンドリア写本といった主要な大文字写本以前に残されている唯一の写本が、パピルス 45 番である。3 世紀に作成されたと想定されるパピルス 45 番か

29 Colwell, "Method in Evaluating Scribal Habits," 108.

30 Royse, *Scribal Habits*, 50-56, 92-93.

ら4世紀までの間にどれほどの写本が作成されたか想像するしかない。作成された写本の数を具体的に示唆するような証拠は皆無であるが、失われた写本は相当な数に及ぶものと思われる。このような状況を考慮すると、パピルス45番にのみ残された唯一の読みが、本来の読みではなかったと断言できないように思われる。さらには、永遠に失われてしまった本来の読みがなかったとも言い切れないようにも思われる。

写本の本文は、写字生と底本（*Vorlage*）の協働作業の結果である。良質の写本を作成するためには、良質の底本と技量のある写字生の両方が必要不可欠である。写字生に資質があっても、手許に良い写本がないならば、良質の写本を作成することは不可能である。逆に底本として良質の写本があっても、写字生に資質がないならば、良質の写本を作成することは難しくなる。

パピルス45番を考える場合、決して完璧な状態ではないが、残された本文はある。パピルス45番を作成する際に写字生が用いた底本は発見されていない。底本が見出されないならば、厳密に写字生の仕事振りのみを評価することは困難である。言い換えると、他の写本には見出されない読み（*singular reading*）であっても、パピルス45番の写字生が底本に見出した読みである可能性を排除することは難しい。理由や原因は何であれ、パピルス45番と同じ写本を底本として作成した他の写本は失われたかもしれない。あるいは、同じ底本に基づいて他には写本は作成されなかったかもしれない。私たちにとって他の写本に見出されない読み（*singular reading*）であるからと言って、同じ読みが他に作成された写本に写字されなかったとは限らない。

訂正と唯一の読み

パピルス45番を様々な角度から調査してきて、14箇所の訂正の跡と他の写本には見出されない読み（*singular reading*）が多く見出された。訂正箇所数が14というのは少ないかもしれないが、個々の訂正は詳細にかかわるものである。訂正箇所を見た限りでは、詳細にまで気を配って訂正した写字生の姿が浮かび上がる。他の写本に見出されない読み（*singular reading*）が二百に及ぶ多数見出される。ColwellやRoyseによると、このような唯一の読みは写字生が作り出したと言う。14箇所の訂正をした写字生と新しい読みを気軽に作り出した写字生が同一人物とは考えにくい。

具体的な例を挙げると、使徒の働き 15 章 7 節に 2 節を挿入した間違いは、パピルス 45 番の唯一の読みの一つである。Royse によると、唯一の読みは、その読みが見出された写本を作成した写字生が作り出したものである。換言すると、パピルス 45 番の写字生が、7 節を書き写し始めた際に目が 2 節に移って、7 節に 2 節を挿入したことになる。ところが、この写字生は目が移って 7 節に 2 節を挿入する大失態をしかしてただけではなく、その間違いに気付いていない。否、間違いであると認識した痕跡は残されていない。でも、2 節を書き写した後に、間違いに気付いて 7 節の中途に戻っている。しかし、訂正を施した痕跡はない。可能な説明は二つに一つしかないと思われる。間違いに気付いたが、訂正を加えて間違いを認めた痕跡を残したくなかったか、残しそびれた。あるいは、パピルス 45 番の写字生は、ただ底本に見出した本文を写字しただけであっただけかもしれない。

パピルス 45 番の写字生は、ルカ福音書 9 章 57 節 58 節を写字した際に、同じような間違いを犯したが、間違いに気付いて訂正している。なぜ使徒の働き 15 章 7 節では、気が付かなかったのか、訂正を施していないのか。他の箇所間違いを訂正した同じ写字生と思われない。このように考えると、パピルス 45 番の底本で、使徒の働き 15 章 7 節に 2 節が既に挿入されていた可能性を想定するだけの価値はあるように思われる。Colwell や Royse は唯一の読みから出発して写字生の資質を評価した。そうではなく、訂正した箇所から出発して写字生の資質を評価して、その上で唯一の読みの起源を探る方法の方がより妥当な方法であるように筆者には思われる。

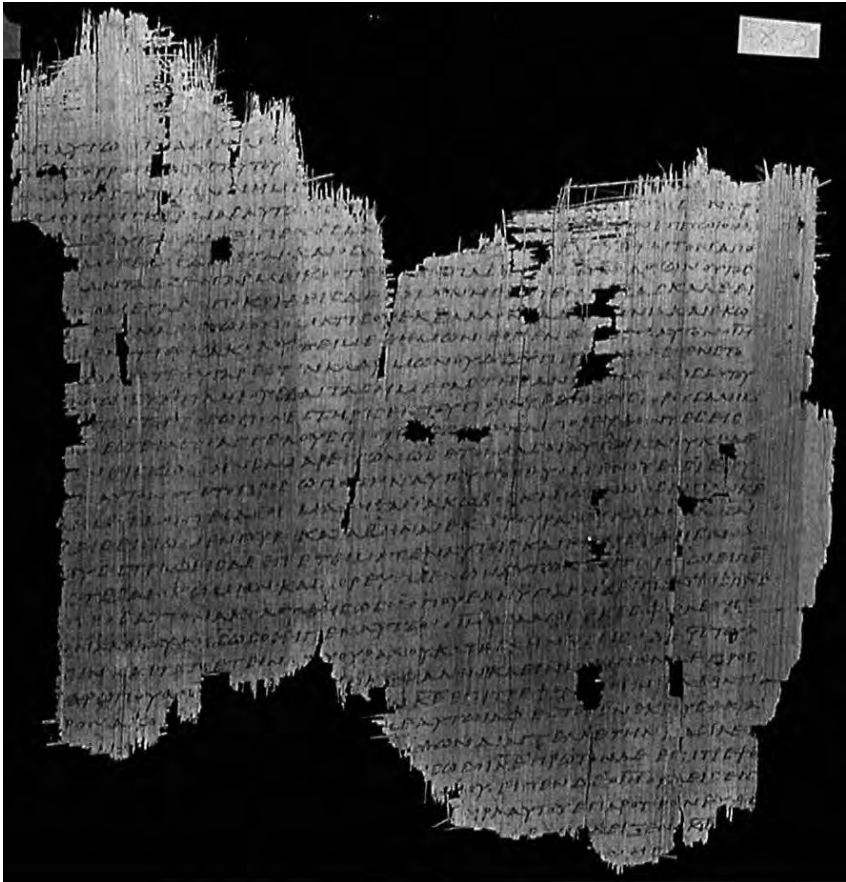


写真1

107頁（ルカ福音書9章45節から10章1節まで）21行から22行にかけて57節を繰り返し書き写したので、上の行間に黒点を書き込んで、削除してある。

次頁（写真2）は、オーストリア国立図書館（ウィーン）所蔵のPap. Vindob. Graec. 31974の裏（Skeatの復元では40頁b）で、マタイ福音書26章41節から26章18節の部分である。2行目と3行目の間にΟΥΚ (οὐκ)を加えて訂正が施されている。

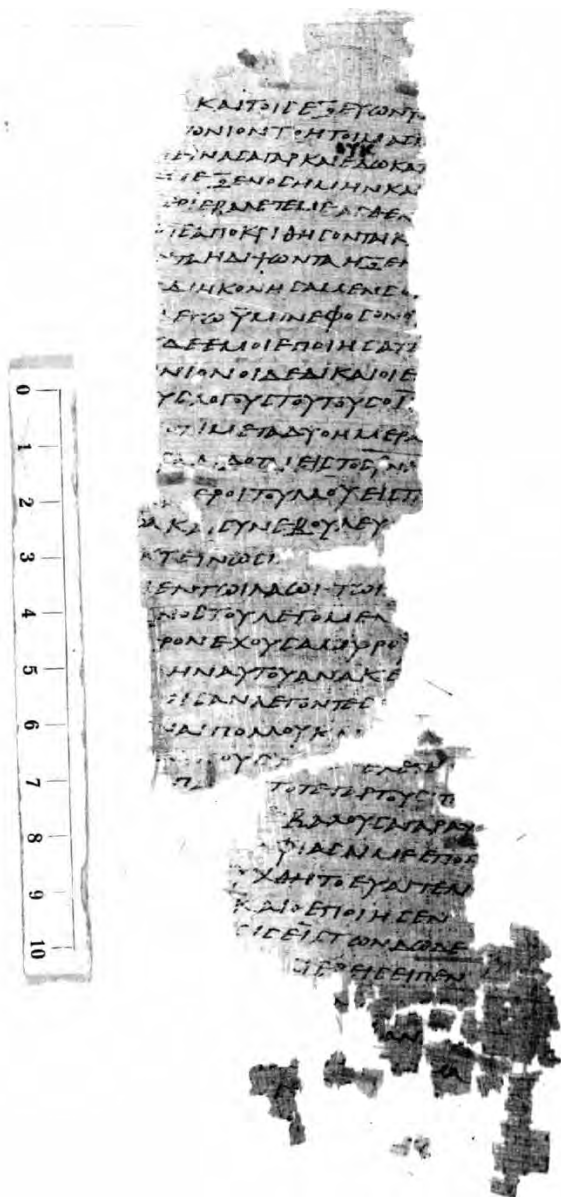


写真 2



写真3

68頁（ヨハネの福音書10章7節から25節）

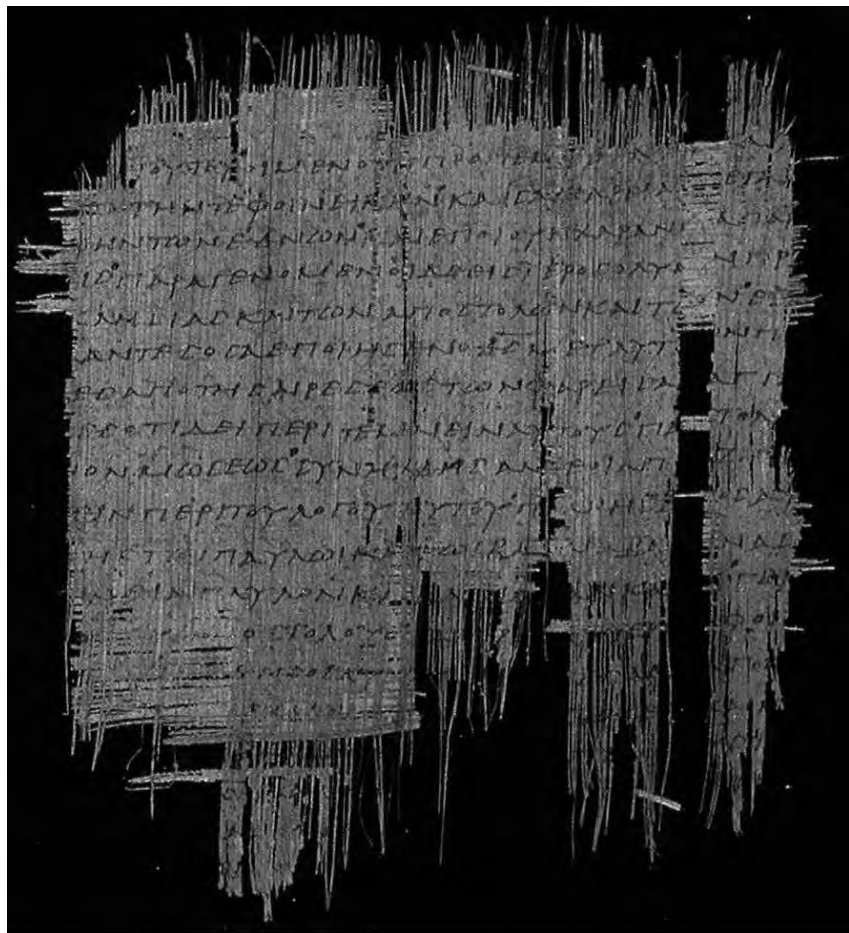


写真 4

194 頁（使徒の働き 15 章 2 節から 9 節）